

生 物

(解答番号 ～)

Ⅰ ヒトの受容器および神経系に関する以下の文章中の、 ～ に最も適切なものを解答群から選び、その番号を解答欄にマークせよ。ただし、異なる番号の に同じものを繰り返し選んでもよい。

- 1) 感覚の受容は刺激の種類に応じて別々の受容器で行われる。からだの回転は（ア）で、からだの傾きは（イ）で受け取られる。また、高い温度は皮膚の温点で受け取られるが、強い熱や強い圧力は皮膚の（ウ）で受け取られる。ここで、（ア）～（ウ）の正しい組み合わせは である。

に対する解答群

	（ア）	（イ）	（ウ）
①	コルチ器	うずまき管	圧 点
②	コルチ器	うずまき管	痛 点
③	コルチ器	前 庭	圧 点
④	コルチ器	前 庭	痛 点
⑤	半規管	うずまき管	圧 点
⑥	半規管	うずまき管	痛 点
⑦	半規管	前 庭	圧 点
⑧	半規管	前 庭	痛 点

2) 網膜には、 細胞と 細胞という 2 種類の視細胞がある。

細胞はうす暗い場所ではよくはたらくが、色の区別には関与しない。

細胞では、ロドプシンとよばれる視物質が光を吸収する。ロドプシンは、 とよばれるタンパク質と の一種であるレチナールが結合したものである。ロドプシンが光を吸収すると、レチナールの構造が変化して から遊離し、光を受容したという情報が視神経に伝わる。明るいところから暗いところへ入ると、最初はものがよく見えないが、ロドプシンが蓄積されると 細胞の感度が(エ)し、見えるようになる。このような現象を(オ)という。また、虹彩は、暗所では瞳孔を(カ)することにより、網膜に達する光量を調節している。

細胞はおもに明るい場所ではたらく、色の区別に関与する。 細胞は、 とよばれる網膜の中央部に、特に多く分布している。

眼は、物体までの距離に応じて水晶体の厚さを変え、焦点の位置を調節して網膜に鮮明な像を結ばせる遠近調節のしくみをもつ。遠くのものを見るとき、毛様筋(毛様体)が(キ)ことで、チン小帯は(ク)、それによって水晶体は(ケ)なる。ここで、(エ)～(カ)の正しい組み合わせは , (キ)～(ケ)の正しい組み合わせは である。

および に対する解答群

- | | | |
|-------|------|------|
| ① グリア | ② 有毛 | ③ 桿体 |
| ④ 上皮 | ⑤ 色素 | ⑥ 錐体 |
| ⑦ 樹状 | ⑧ 鞭毛 | ⑨ 食 |

に対する解答群

- | | |
|----------|----------|
| ① アクアポリン | ② オプシン |
| ③ オペロン | ④ キネシン |
| ⑤ シャペロン | ⑥ ダイニン |
| ⑦ チューブリン | ⑧ フォトプシン |
| ⑨ ペクチン | ⑨ ミオグロビン |

5 に対する解答群

- ① アミノ酸 ② 脂肪酸 ③ ステロイドホルモン
④ ビタミン A ⑤ ビタミン D ⑥ ペプチドホルモン

6 に対する解答群

- ① 暗 帯 ② 終 板 ③ 黄 斑 ④ 中心柱
⑤ 形成層 ⑥ 明 帯 ⑦ 側 板

7 に対する解答群

	(エ)	(オ)	(カ)
①	上 昇	明順応	縮 小
②	上 昇	明順応	拡 大
③	上 昇	暗順応	縮 小
④	上 昇	暗順応	拡 大
⑤	低 下	明順応	縮 小
⑥	低 下	明順応	拡 大
⑦	低 下	暗順応	縮 小
⑧	低 下	暗順応	拡 大

	(キ)	(ク)	(ケ)
①	収縮する	緊張し	薄 く
②	収縮する	緊張し	厚 く
③	収縮する	ゆるみ	薄 く
④	収縮する	ゆるみ	厚 く
⑤	ゆるむ	緊張し	薄 く
⑥	ゆるむ	緊張し	厚 く
⑦	ゆるむ	ゆるみ	薄 く
⑧	ゆるむ	ゆるみ	厚 く

3) 中枢神経系は脳と脊髄から構成される。脊髄は、脊椎骨の中を通っている円柱状の神経組織であり、その一端は呼吸運動や血液循環の中樞がある 9 に直接つながっている。脊髄の横断面において、その中心部には神経細胞体が集まっている(コ)が、周辺部には神経繊維が集まっている(サ)が観察される。脊髄からは、(シ)対の脊髄神経が左右対称にでており、中枢神経と末梢器官との間で情報を伝える役割を果たしている。このうち、痛みや触覚を伝える感覚神経は脊髄の(ス)を、骨格筋の収縮を指令する運動神経は脊髄の(セ)を通る。

特定の刺激に対して無意識に起こる反応を反射という。瞳孔反射の中樞は 10 にある。また、膝蓋腱反射の中樞は 11 にある。ここで、(コ)～(セ)の正しい組み合わせは 12 である。

9 ～ 11 に対する解答群

- ① 大 脳 ② 視 床 ③ 視床下部 ④ 中 脳
⑤ 小 脳 ⑥ 延 髄 ⑦ 脊 髄

12 に対する解答群

	(コ)	(サ)	(シ)	(ス)	(セ)
①	灰白質	白 質	12	背 根	腹 根
②	灰白質	白 質	12	腹 根	背 根
③	灰白質	白 質	31	背 根	腹 根
④	灰白質	白 質	31	腹 根	背 根
⑤	白 質	灰白質	12	背 根	腹 根
⑥	白 質	灰白質	12	腹 根	背 根
⑦	白 質	灰白質	31	背 根	腹 根
⑧	白 質	灰白質	31	腹 根	背 根

以下の反射行動に関する a ～ c の記述のうち、反射中枢が膝蓋腱反射と同じである反射は、

13

 である。

- a 食べものを口に入れると、唾液がでる。
- b 食べものが気管に入ると、せきがでる。
- c 指先に炎が誤って触れると、すばやく手を引っ込める。

13

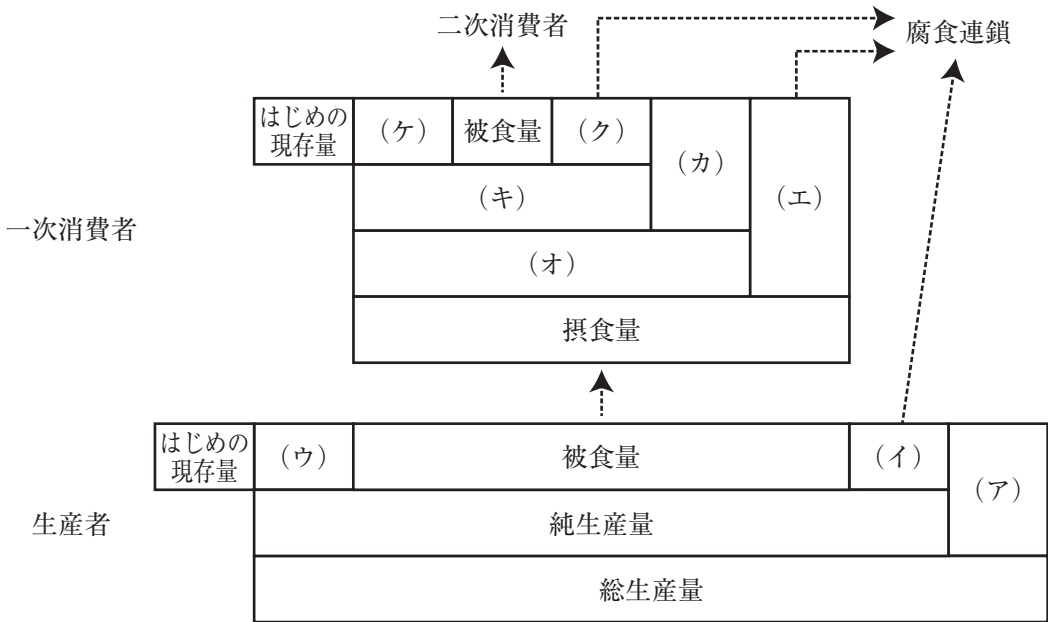
 に対する解答群

- ① a のみ ② b のみ ③ c のみ ④ a, b のみ
- ⑤ a, c のみ ⑥ b, c のみ ⑦ a, b, c

(第Ⅱ問は次ページから始まる)

Ⅱ 生態系の物質生産と消費に関する以下の文章中の 14 ～ 24 に最も適切なものを解答群から選び、その番号または記号を解答欄にマークせよ。ただし、異なる番号の に同じものを繰り返し選んでもよい。

1) 図Ⅱ－1はある森林生態系の一定期間の物質収支を模式的に示したものである。ただし、図中の枠の大きさが、各項目の実際の量や比を表すものではない。また、はじめの現存量はこの期間における最初の生物体の有機物量である。生産者が一定期間内に生産した有機物の総量は総生産量とよばれる。この総生産量から(ア)を差し引いたものは、純生産量とよばれる。純生産量から被食量と(イ)を差し引いたものは、(ウ)となる。一次消費者の栄養段階において、摂食量から(エ)を差し引いたものは、(オ)となり、(オ)から(カ)を差し引いたものは、(キ)となる。(キ)から被食量と(ク)を差し引いたものは、(ケ)となる。ここで、(ア)～(ウ)の正しい組み合わせは 14，(エ)～(カ)の正しい組み合わせは 15，(キ)～(ケ)の正しい組み合わせは 16 である。



図Ⅱ－1

14 に対する解答群

	(ア)	(イ)	(ウ)
①	光合成量	枯死量	生産量
②	光合成量	枯死量	成長量
③	光合成量	同化量	生産量
④	光合成量	同化量	成長量
⑤	呼吸量	枯死量	生産量
⑥	呼吸量	枯死量	成長量
⑦	呼吸量	同化量	生産量
⑧	呼吸量	同化量	成長量

15 に対する解答群

	(エ)	(オ)	(カ)
①	死滅量	生産量	成長量
②	死滅量	生産量	呼吸量
③	死滅量	同化量	成長量
④	死滅量	同化量	呼吸量
⑤	不消化排出量	生産量	成長量
⑥	不消化排出量	生産量	呼吸量
⑦	不消化排出量	同化量	成長量
⑧	不消化排出量	同化量	呼吸量

16 に対する解答群

	(キ)	(ク)	(ケ)
①	生産量	死滅量	成長量
②	生産量	死滅量	呼吸量
③	生産量	不消化排出量	成長量
④	生産量	不消化排出量	呼吸量
⑤	同化量	死滅量	成長量
⑥	同化量	死滅量	呼吸量
⑦	同化量	不消化排出量	成長量
⑧	同化量	不消化排出量	呼吸量

純生産量を生産者の現存量で割った値を回転率という。回転率を陸上生態系と水界生態系で比べると、水界生態系の回転率は陸上生態系より大きい。

水界生態系において、単位面積あたりの純生産量は、一般に（コ）域より（サ）域のほうが大きい。これは、（コ）域では（シ）が不足しているためであるが、鉛直混合が起こる海域では、（コ）域でも単位面積あたりの純生産量は大きくなる。ここで、（コ）～（シ）の正しい組み合わせは 17 である。

17 に対する解答群

	（コ）	（サ）	（シ）
①	沿 岸	外 洋	栄養塩類
②	沿 岸	外 洋	酸 素
③	沿 岸	外 洋	二酸化炭素
④	沿 岸	外 洋	日照量
⑤	外 洋	沿 岸	栄養塩類
⑥	外 洋	沿 岸	酸 素
⑦	外 洋	沿 岸	二酸化炭素
⑧	外 洋	沿 岸	日照量

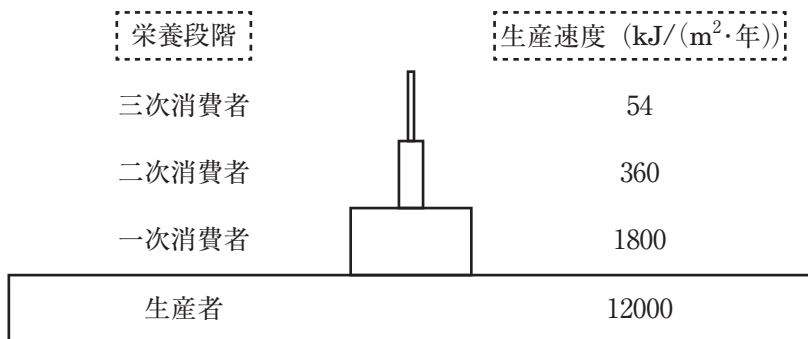
下線部の主な理由は、 18 からである。

18 に対する解答群

- ① 海洋が地球の面積の約70%を占める
- ② 乾燥による成長の制限が水界生態系では見られない
- ③ 温暖で湿潤な気候ほど純生産量が大きくなる
- ④ 陸上生態系の純生産量は降水量と気温の影響を受ける
- ⑤ 非同化器官が水生植物や植物プランクトンにはほとんどない

個体数，生物量，生産速度などを栄養段階ごとに帯状に表し積み重ねたものを生態ピラミッドという。生態ピラミッドは，一般には，栄養段階の上位のものほど帯の幅が狭くなり，全体の形がピラミッド状になる。個体数ピラミッド，生物量ピラミッド，生産速度ピラミッドのうち，栄養段階の上位と下位の帯の幅の逆転が見られることのあるピラミッドは 19 である。

図Ⅱ－２は，ある生態系の生産速度ピラミッドを示している。図Ⅱ－２において，二次消費者のエネルギー効率 20 %であることがわかる。



図Ⅱ－２

19 に対する解答群

- ① 個体数ピラミッドのみ ② 生物量ピラミッドのみ
- ③ 生産速度ピラミッドのみ ④ 個体数ピラミッドと生物量ピラミッド
- ⑤ 個体数ピラミッドと生産速度ピラミッド
- ⑥ 生物量ピラミッドと生産速度ピラミッド

20 に対する解答群

- ① 0.03 ② 0.15 ③ 0.2 ④ 1.5 ⑤ 2 ⑥ 3
- ⑦ 5 ⑧ 7 ⑨ 15 ⑩ 20 ⑪ a 30 ⑫ b 40

2) 炭素は光合成や呼吸，食物連鎖などを通じて生態系内を循環している。しかし，長い年月をかけてサンゴの骨格などが堆積し，石灰岩や大理石が生成されたりすると，これらに 21 のかたちとして含まれる炭素は，生物間のつながりを介した炭素の循環から外れる。

窒素も炭素と同様に生態系内を循環している。生物の遺骸や排泄物に含まれる有機窒素化合物は分解者により NH_4^+ に分解される。 NH_4^+ は（ス）により酸化されて NO_2^- となり， NO_2^- は（セ）により酸化されて NO_3^- となる。 NO_2^- や NO_3^- は脱窒素細菌により還元されて N_2 として大気中に放出される。大気中の N_2 は（ソ）などの窒素固定細菌により還元され， NH_4^+ となる。

土壌中の NO_3^- や NH_4^+ などの無機窒素化合物は，植物の根から吸収される。根から吸収された NO_3^- は葉で還元され NH_4^+ となる。 NH_4^+ は（タ）合成酵素により（チ）と結合し，（タ）が合成される。（タ）のアミノ基は（チ）合成酵素により（ツ）に転移され，（ツ）は（チ）になる。ここで，（ス）～（ソ）の正しい組み合わせは 22 ，（タ）～（ツ）の正しい組み合わせは 23 である。

21 に対する解答群

- | | | |
|------|-----------|-----------|
| ① 石炭 | ② 炭酸カルシウム | ③ 炭酸水素イオン |
| ④ 泥炭 | ⑤ 二酸化炭素 | |

22 に対する解答群

	(ス)	(セ)	(ソ)
①	亜硝酸菌	硝酸菌	アグロバクテリウム
②	亜硝酸菌	硝酸菌	アゾトバクター
③	亜硝酸菌	硝酸菌	枯草菌
④	亜硝酸菌	硝酸菌	緑色硫黄細菌
⑤	硝酸菌	亜硝酸菌	アグロバクテリウム
⑥	硝酸菌	亜硝酸菌	アゾトバクター
⑦	硝酸菌	亜硝酸菌	枯草菌
⑧	硝酸菌	亜硝酸菌	緑色硫黄細菌

23 に対する解答群

	(タ)	(チ)	(ツ)
①	グルタミン	グルタミン酸	ケトグルタル酸
②	グルタミン	ケトグルタル酸	グルタミン酸
③	グルタミン酸	グルタミン	ケトグルタル酸
④	グルタミン酸	ケトグルタル酸	グルタミン
⑤	ケトグルタル酸	グルタミン	グルタミン酸
⑥	ケトグルタル酸	グルタミン酸	グルタミン

以下の a～d のうち有機窒素化合物に該当するものは 24 である。

a アクチン b RNA c セルロース d デンプン

24 に対する解答群

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| ① a のみ | ② b のみ | ③ c のみ |
| ④ d のみ | ⑤ a, b のみ | ⑥ a, c のみ |
| ⑦ a, d のみ | ⑧ b, c のみ | ⑨ b, d のみ |
| ⑩ c, d のみ | Ⓐ a, b, c のみ | Ⓑ a, b, d のみ |
| Ⓒ a, c, d のみ | Ⓓ b, c, d のみ | Ⓔ a, b, c, d |

(第Ⅲ問は次ページから始まる)

Ⅲ 植物の環境応答や成長の制御と植物ホルモンに関する以下の文章中の 25 ～
36 に最も適切なものを解答群から選び、その番号を解答欄にマークせよ。ただし、異なる番号の に同じものを繰り返し選んでもよい。

- 1) 植物は周囲の環境の変化に対する応答や防御を行うしくみをもっている。植物が外界の乾燥を感知すると、25 が合成される。25 は孔辺細胞に作用して、カリウムイオンの(ア)を促す。これにより、細胞の浸透圧が(イ)し、水が(ウ)することで細胞の体積が(エ)し、気孔が閉じる。一方、26 が青色光を受容すると、孔辺細胞におけるカリウムイオンの(オ)が促され、最終的に気孔が開く。

外界の温度が低下すると、細胞内で糖やアミノ酸の合成が(カ)される。これにより、凝固点が(キ)し、細胞が凍結しにくくなる。また、このとき、生体膜において膜の流動性を高める脂質の割合が(ク)することも知られている。

25 には、植物の種子を休眠状態にする作用もある。この時 25 は、種子の発芽を促すはたらきをもつ 27 と拮抗的にはたらく。オオムギの種子の糊粉層において、27 は 28 の遺伝子の転写を促進させる。産生された 28 により、胚乳中の(ケ)が、(コ)などに分解される。(コ)は最終的に(サ)に分解され、これが胚に栄養分として供給されると、種子の発芽が促進される。ここで、(ア)～(オ)の正しい組み合わせは 29 ，(カ)～(ク)の正しい組み合わせは 30 ，(ケ)～(サ)の正しい組み合わせは 31 である。

25 および 27 に対する解答群

- | | | |
|---------|----------|---------|
| ① エチレン | ② バソプレシン | ③ ジベレリン |
| ④ フロリゲン | ⑤ アブシシン酸 | ⑥ チロキシン |

26 に対する解答群

- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| ① フォトプシン | ② ロドプシン | ③ フォトリポシン |
| ④ プロトロンビン | ⑤ フィトクロム | ⑥ クリプトクロム |

28 に対する解答群

- ① カタラーゼ ② マルターゼ ③ スクラーゼ
④ ラクターゼ ⑤ セルラーゼ ⑥ アミラーゼ

29 に対する解答群

	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)
①	流 入	上 昇	流 入	増 加	流 出
②	流 入	上 昇	流 出	減 少	流 出
③	流 入	低 下	流 入	増 加	流 出
④	流 入	低 下	流 出	減 少	流 出
⑤	流 出	上 昇	流 入	増 加	流 入
⑥	流 出	上 昇	流 出	減 少	流 入
⑦	流 出	低 下	流 入	増 加	流 入
⑧	流 出	低 下	流 出	減 少	流 入

30 に対する解答群

	(カ)	(キ)	(ク)
①	促 進	上 昇	増 加
②	促 進	上 昇	減 少
③	促 進	低 下	増 加
④	促 進	低 下	減 少
⑤	抑 制	上 昇	増 加
⑥	抑 制	上 昇	減 少
⑦	抑 制	低 下	増 加
⑧	抑 制	低 下	減 少

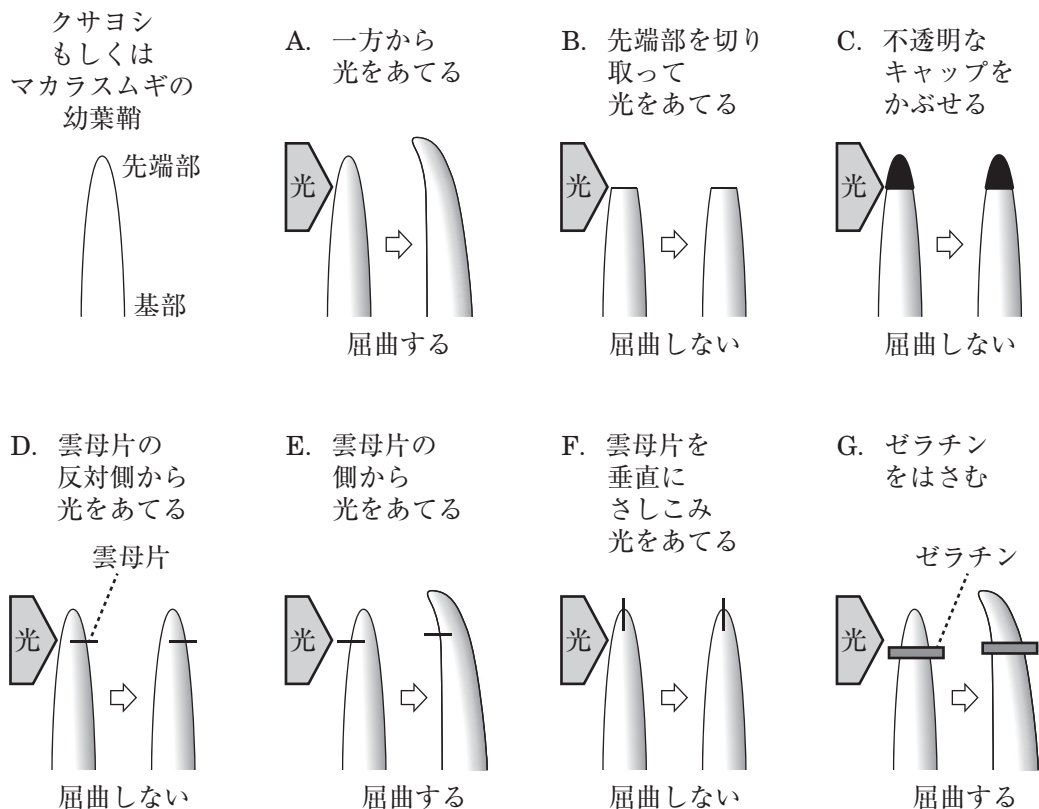
	(ケ)	(コ)	(サ)
①	グルコース	マルトース	デンプン
②	グルコース	デンプン	マルトース
③	マルトース	グルコース	デンプン
④	マルトース	デンプン	グルコース
⑤	デンプン	グルコース	マルトース
⑥	デンプン	マルトース	グルコース

(第Ⅲ問 2)は次ページから始まる)

2) 茎の成長にかかわるオーキシンは、主に成長している茎の（シ）で合成される。茎の細胞では、オーキシンの排出輸送体が（ス）側の細胞（セ）に集中しているため、オーキシンは茎の中を極性移動する。

オーキシンは、植物が光のあたった方向へ屈曲する現象にもかかわっている。マカラスムギなどの幼葉鞘に光があたると、その刺激は 32 によって受け取られる。これにより、オーキシンの排出輸送体の細胞（セ）上での分布が変化し、オーキシンの分布が変わることで、屈曲がおこる。

屈曲のメカニズムを解明するため、さまざまな実験がおこなわれてきた。図ⅢのA～Cは、19世紀末にイギリスの科学者であるダーウィンがクサヨシの幼葉鞘をもちいておこなった実験を示している。Aの実験により、幼葉鞘に片側から光をあてると、幼葉鞘は光の方向に屈曲することがわかった。また、BとCの実験から屈曲には幼葉鞘に先端部が必要なことと、先端部に光があたる必要があることがわかった。



図Ⅲ

図Ⅲの D～G は、20世紀の初めにデンマークの科学者であるボーイセン イェンセンがマカラスムギの幼葉鞘をもちいておこなった実験を示している。この実験において、雲母片は物質を通さない。ゼラチンは水溶性の物質を通し、脂溶性の物質を通さない。D～G の実験結果から、光があたったという情報は、幼葉鞘の（ソ）で作られた（タ）の物質が、光の（チ）側に移動し、その後、光の（チ）側の（ツ）方向へ移動することによって伝えられることが考えられた。ここで、（シ）～（セ）の正しい組み合わせは 33 , （ソ）～（ツ）の正しい組み合わせは 34 である。

32 に対する解答群

- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| ① フォトプシン | ② ロドプシン | ③ フォトリポピン |
| ④ プロトロンビン | ⑤ フィトクロム | ⑥ クリプトクロム |

33 に対する解答群

	(シ)	(ス)	(セ)
①	先端部	先端部	壁
②	先端部	先端部	膜
③	先端部	基 部	壁
④	先端部	基 部	膜
⑤	基 部	先端部	壁
⑥	基 部	先端部	膜
⑦	基 部	基 部	壁
⑧	基 部	基 部	膜

34 に対する解答群

	(ソ)	(タ)	(チ)	(ツ)
①	先端部	水溶性	あたる	基 部
②	先端部	水溶性	あたらない	基 部
③	先端部	脂溶性	あたる	基 部
④	先端部	脂溶性	あたらない	基 部
⑤	基 部	水溶性	あたる	先端部
⑥	基 部	水溶性	あたらない	先端部
⑦	基 部	脂溶性	あたる	先端部
⑧	基 部	脂溶性	あたらない	先端部

3) 花が受粉すると，子房や花床が成長し果実となる。果実の成長はオーキシンや **35** によって促進される。老化した果実が落果する際には，果柄のつけ根にある離層において，細胞壁間の接着をゆるめる酵素がつくられる。この酵素の合成を直接促進する役割をもつのは **36** である。

35 および **36** に対する解答群

- | | | |
|---------|----------|----------|
| ① エチレン | ② バソプレシン | ③ ジベレリン |
| ④ フロリゲン | ⑤ アブシシン酸 | ⑥ チロキシシン |

Ⅳ 酵素に関する以下の文章中の 37 ～ 48 に最も適切なものを解答群から選び、その番号または記号を解答欄にマークせよ。ただし、異なる番号の に同じものを繰り返し選んでもよい。

- 1) 化学反応が起こるためには、物質は反応の途中で一時的に反応しやすい状態（遷移状態）になる必要がある。反応前の初期状態と遷移状態とのエネルギー差を（ア）エネルギーという。酵素などの触媒があると反応が進みやすくなるのは、酵素が（ア）エネルギーを（イ）させるからである。ここで、（ア）と（イ）の正しい組み合わせは 37 である。

37 に対する解答群

	（ア）	（イ）
①	活性化	増加
②	活性化	低下
③	反応	増加
④	反応	低下

2) 光合成ではたらく脱水素酵素には 38 を補酵素とするものがある。
38 は 39 を成分とする有機化合物である。この脱水素酵素により、その基質から水素が取り除かれる反応では、脱水素酵素の 38 が 40 される。

38 および 39 に対する解答群

- | | | |
|---------------------|-------------------|----------|
| ① FAD | ② NADP^+ | ③ ビタミン A |
| ④ ビタミン B_2 | ⑤ ビタミン C | ⑥ ニコチン酸 |
| ⑦ ピルビン酸 | ⑧ マロン酸 | |

40 に対する解答群

- | | | | |
|------|------|--------|---------|
| ① 酸化 | ② 還元 | ③ リン酸化 | ④ アセチル化 |
|------|------|--------|---------|

3) プタの肝臓などに含まれるカタラーゼは、2分子の過酸化水素を分解して（ウ）分子の水と（エ）分子の酸素を生成する。この酵素は（オ）酵素に分類される。ここで、（ウ）～（オ）の正しい組み合わせは

41

 である。

41

 に対する解答群

	（ウ）	（エ）	（オ）
①	1	1	加水分解
②	1	1	酸化還元
③	1	1	脱 離
④	1	2	加水分解
⑤	1	2	酸化還元
⑥	1	2	脱 離
⑦	2	1	加水分解
⑧	2	1	酸化還元
⑨	2	1	脱 離
⑩	2	2	加水分解
Ⓐ	2	2	酸化還元
Ⓑ	2	2	脱 離

- 4) 酵素 X, 触媒 Y の酵素反応を調べるために, 以下の一連の実験を行った。表Ⅳには, 実験に用いた補酵素 A, 基質 B, 酵素 X, 触媒 Y の性質を示した。

表Ⅳ

	性質
補酵素 A	・ 100℃で 5 分間熱しても, 全く影響を受けない。
基質 B	・ 100℃で 5 分間熱しても, 全く影響を受けない。
酵素 X	・ 補酵素 A の存在下で基質 B と反応し, 水に不溶の気体 C を生成する。 ・ 補酵素 A がないと活性をもたない。 ・ 溶液中の補酵素 A の濃度が 0.01%以上で完全な活性をもつ。 ・ 100℃で 5 分間熱すると, 完全に失活する。
触媒 Y	・ 基質 B と反応し, 水に不溶の気体 C を生成する。 ・ 補酵素 A の有無によって活性に影響はない。 ・ 100℃で 5 分間熱しても, 活性に全く影響しない。

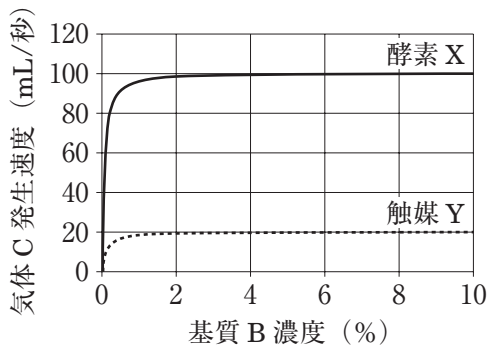
なお, 酵素 X と触媒 Y は, お互いの活性に影響を及ぼさない。酵素 X または触媒 Y の反応は室温で測定し, また, 酵素 X, 触媒 Y, 補酵素 A や基質 B を溶かした溶液には, 全て pH7 の緩衝液を用いた。溶液の混合などにより pH は変化せず, さらに, 100℃で 5 分間熱したときに溶液の量に変化は生じないものとする。

酵素 X の濃度 0.1 mg/mL, 補酵素 A の濃度 0.01%である反応溶液 1 mL において, 基質 B 濃度 (%) を変化させたとき, 反応開始直後の 1 秒間にどのくらいの気体 C が発生するかを測定した。また, 触媒 Y の濃度 0.1 mg/mL, 補酵素 A の濃度 0.01%である反応溶液 1 mL において, 基質 B 濃度 (%) を変化させたとき, 反応開始直後の 1 秒間にどのくらいの気体 C が発生するかを測定した。その結果, 図Ⅳ-1 が得られた。図Ⅳ-1 に示しているように, 基質 B 濃度が 4 %以上の条件では, 酵素 X と触媒 Y のいずれも気体 C の発生速度は一定となった。

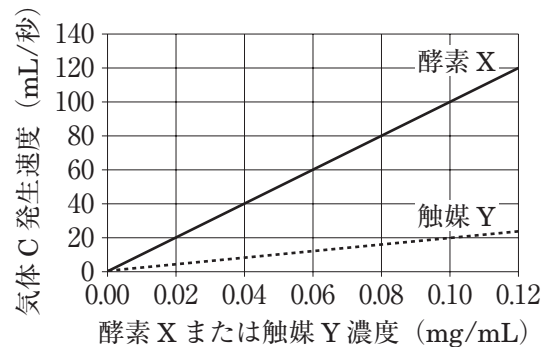
基質 B の濃度 6 %, 補酵素 A の濃度 0.01%である反応溶液 1 mL において, 酵素 X または触媒 Y の濃度 (mg/mL) を変化させたとき, 反応開始直後の 1 秒間にどのくらいの気体 C が発生するかを測定したところ, 図Ⅳ-2 が得られた。

上記の実験結果から、基質B濃度5%，補酵素A濃度0.01%，酵素X濃度0.02 mg/mLである反応溶液10 mLから、反応開始直後の1秒間に 42 mLの気体Cが発生すると算出できる。また、基質B濃度5%，触媒Y濃度0.02 mg/mLである反応溶液10 mLから、反応開始直後の1秒間に 43 mLの気体Cが発生すると算出できる。

酵素X濃度0.06 mg/mL、基質B濃度18%の溶液0.5 mLと酵素X濃度0.06 mg/mL、補酵素A濃度0.03%の溶液1.0 mLを混合して反応溶液1.5 mLをつくった。この反応溶液1.5 mLから、反応開始直後の1秒間に 44 mLの気体Cが発生すると算出できる。



図Ⅳ－1



図Ⅳ－2

42 ～ 44 に対する解答群

- | | | | | | |
|-------|-------|------|------|-------|-------|
| ① 2 | ② 4 | ③ 6 | ④ 8 | ⑤ 10 | ⑥ 12 |
| ⑦ 16 | ⑧ 20 | ⑨ 24 | ⑩ 30 | Ⓐ 40 | Ⓑ 50 |
| Ⓒ 60 | Ⓓ 70 | Ⓔ 80 | Ⓕ 90 | Ⓖ 100 | Ⓗ 120 |
| Ⓙ 200 | ⓰ 240 | | | | |

次に以下のように試料の入った 8 本の試験管を用意した。

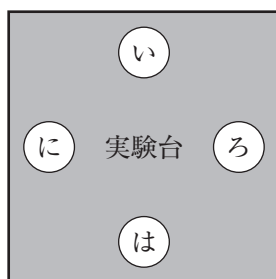
[試料]

- ・ 0.10 mg/mL の酵素 X 溶液が 10 mL 入った試験管（試験管 X）を 2 本
- ・ 0.50 mg/mL の触媒 Y 溶液が 10 mL 入った試験管（試験管 Y）を 2 本
- ・ 補酵素 A 濃度 0.06% の溶液が 10 mL 入った試験管（試験管 A）を 2 本
- ・ 基質 B 濃度 24% の溶液が 10 mL 入った試験管（試験管 B）を 2 本

さらに、図Ⅳ－3 のように座席①，③，④，⑤を配置した実験台を用意した。

まず、上記の 8 本の中から、座席①に試験管 X を 1 本、座席③に試験管 Y を 1 本、座席④に試験管 A を 1 本、座席⑤に試験管 B を 1 本置いて、それぞれ既知試料とした。

次に、残り 4 本（試験管 X，Y，A，B それぞれ 1 本ずつ）を誰がどの試験管を持っているか分からないように、太郎，花子，次郎，三郎にそれぞれ 1 本ずつ未知試料として配布した。その後、4 人には座席①，③，④，⑤に、自由に 1 人ずつ座ってもらった。各座席の「右隣」「左隣」は、その人が実験台に向かって座ったときの右手側，左手側に座る人を指す。



図Ⅳ－3

以下の実験を行い、気体 C の発生の有無を調べた。

[実験 1]

全員が、それぞれの自分の座席に置いてある既知試料と自分の持つ未知試料から 1 mL ずつ取り、混合したところ、次郎の混合液だけ気体 C が発生した。

[実験 2]

太郎の持っている未知試料 1 mL を、太郎の左隣に座っている人の未知試料 1 mL と混合したところ、気体 C が発生した。この結果から、太郎の持っている未知試料と太郎の左隣に座っている人の未知試料の組み合わせは、「(カ) と (キ)」または「(キ) と (カ)」であることがわかる。

[実験 3]

太郎の持っている未知試料 1 mL と、太郎の正面に座っている人の既知試料と未知試料からそれぞれ 1 mL とり、3 つを混合したところ、気体 C が発生した。

[実験 4]

花子の持っている未知試料 1 mL と、花子の左隣と右隣に座っている人の未知試料からそれぞれ 1 mL ずつもらい、3 つを混合したところ、気体 C が発生した。

[実験 5]

花子の持っている未知試料 1 mL と、花子の左隣と右隣に座っている人の未知試料からそれぞれ 1 mL ずつもらい、それぞれを別々に 100℃ で 5 分間熱した後、溶液が冷めるのを待って、3 つを混合したところ、気体 C は発生しなかった。

[実験 4] と [実験 5] の結果から、花子の正面に座っている人の未知試料は

45 であることがわかる。

[実験 1] ～ [実験 5] の結果から、以下のことがわかる。太郎の未知試料と太郎の右隣の人の未知試料を混合すると気体 C は発生 (ク)。花子と花子の右隣の人の未知試料を混合すると気体 C は発生 (ケ)。太郎が持っている未知試料は 46 である。ここで、(カ) と (キ) の正しい組み合わせは 47 , (ク) と (ケ) の正しい組み合わせは 48 である。

45 および 46 に対する解答群

- ① 酵素 X 溶液 ② 触媒 Y 溶液 ③ 補酵素 A 溶液 ④ 基質 B 溶液

47 に対する解答群

	(カ)	(キ)
①	補酵素 A 溶液	基質 B 溶液
②	補酵素 A 溶液	酵素 X 溶液
③	補酵素 A 溶液	触媒 Y 溶液
④	基質 B 溶液	酵素 X 溶液
⑤	基質 B 溶液	触媒 Y 溶液
⑥	酵素 X 溶液	触媒 Y 溶液

48 に対する解答群

	(ク)	(ケ)
①	する	する
②	する	しない
③	しない	する
④	しない	しない